図書紹介（109）

『柳田国男の話』（室井光広著　東海教育研究所、2014 年）

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

お座敷ワラシ列車に乗って、スイッチバックを繰り返し、柳田国男の世界を行きつ戻りつしていこう。そういう当方は、柳田民俗学の田畑を耕す小作人の柳田耕作。別名柳田吾作（やなぎ・たごさく）、またの名をスミッコワラシとも言う。おっと、これはいけない。本書を通じて柳田民俗学の世界に分け入るつもりが、本書の著者の室井ワールドのほうに入り込んでしまいそうだ。そこで再びスイッチバック、柳田民俗学の停車場に「そ」を聞きにいくべく、奥ゆかしき旅にもう一度出発しなおさなければ。いや、これではもっといけない。文体まで室井光広流になってしまった。

でも、せっかくだから読者もこの際、単独者ならぬ耽読者になって、お座敷ワラシ列車の一乗客（スミッコワラシ）として便乗させてもらうのも悪くはない。そうすれば、長閑（のどか）な列車にガタゴトと揺られながら、本書の 36 の章（駅）に各駅停車しては、当地の景色をあれこれと楽しみ、気に入れば途中下車して散策することができる。「今ハ山中、今ハ浜」、そして気がついたら、あっという間に最終駅の「柳多留」。柳田国男の樽酒を一杯飲んで、ほうと声が出て、もう一度気に入った頁を繰り直す。宇宙を天翔ける銀河鉄道のような爽快さはないが、近代百年の急斜面を上り下りの柳田耕作列車もまた面白い。今のご時世、こんなスペシャルな旅はなかなか出来ないものだ。

室井ワールドにはまると（まさに耽読者）、こちらまでそのタマシイが乗り移ってしまいそうである。それだけ室井光広の語りは独特なものだが、本書の魅力はやはり何と言っても、柳田国男を世界文学レベルの饗宴において語り、その中で彼の著作を読み解こうとするところにある。第 1 章「極私的民俗学入門」から第 36 章「柳多留」まで、柳田民俗学が単独で論じられる章は一つもなく、世界文学、日本文学、他の民俗学の有りようとも交錯させながら、その特質を浮かび上がらせようとする。

世界文学で取り上げられるのは、モンテーニュ、セルバンテス、ゲーテ、キルケゴール、カフカ、プルースト、ボルヘスといった人々だ。日本文学で引き合いに出されるのは、石川啄木、宮沢賢治、太宰治、寺山修司といった、「東北思想詩人」たちである。民俗学者では、折口信夫と宮本常一が主な比較対象となっている。こうした人々との星座的付置関係（コンステレーション）の中で、柳田国男の姿はどう現れてくるだろうか。

問題が雲をつかむような場合、よく補助線を引いて考えよということが言われるが、柳田国男という巨人を理解しようとするとき、室井はこれらの錚々たる学問芸術の巨人を縦横無尽に引いてくる。そのため、補助線がからまりあってますます混沌としてしまう。しかし不思議なことに、そうしていくと実はますます柳田の巨大な姿が浮かび上がってくるという仕掛けになっている。室井自身、この姿を「『共同の飲食』を伴う全人間的な魂のシュンポシオンのための巨大な酒樽―柳田国男樽」（350 頁）に喩えたのだった（この柳田国男樽こそ「柳多留」なのである）。

私は、本書『柳田国男の話』を 2 回通読した。1 回目は読書の楽しみとして、2 回目はこの「図書紹介」を書くために。それでいよいよもって思ったのは、私がもう十数年以上も前に青森市の R 堂古書店で格安（たしか 2 万円もしなかったように思う）で購入したまま、積読状態になっている筑摩書房の『定本柳田國男集』全 31 巻及び別巻をきちんと読み直してみたい、ということだった。そうすれば柳田自身の作品こそ、世界文学の魂のシュンポシオン（饗宴）とは何なのかを理解する最大の補助線になるのではないか。

室井の柳田国男論を読んで、再度柳田を読み直す幾つかのポイントに気が付いた。そこから 2 点だけ書いておく。1 点目は、上記『定本』の総索引によれば、柳田がその膨大な著作群の中で、「ふるさと」という言葉を一度も使っていないことである（故郷という文字は使用している）。これは意外なことではないだろうか。

我々は、日本人の魂のふるさとの原風景を知ろうと、『遠野物語』や『山の人生』、『海上の道』などを繙（ひもと）くのであるが、そこには「ふるさと」なる語はどこにも姿を現わさない。どこにも現れない「ふるさと」の心象風景が、実は柳田民俗学における文字通りのユートピア（どこにもない場所）的世界であり、それだからこそ柳田が文学的ともいえる書き方で彼の民俗学を形作っていったのである。

しかし、それは文学的と言い切るにしては、柳田の文体の「低い」調子が気になるところである。これが 2 点目。室井はそこにも着目して、本書の中で繰り返しこの点を指摘している。柳田国男に世界文学思想レベルの強度をもし認めるとしたら、実はその「低い」調子こそ肝心要の点なのだ。この強度は、「声高で硬質の主義主張から限りなく遠く離れた、柳の枝の如くしなやかにたわむ柔らかく低いトーンをもつ文体の強靭さ」（241 頁）にほかならない。

柳田国男の文体の強靭さは、モンテーニュ、ボルヘス、プルーストの散文に通じる「エセー」のそれである。ここでいうエセーとは、書物経由の「空想」を一つ一つねばり強く現実と照応させる振る舞いとしての「試み（エセー）」を指す（245 頁）。そうした視座から、「『すべてがわかった』という気にさせるあらゆる通念を根源的に疑うデカルト的懐疑を日本学に徹底させた日本近代最大最良のユマニストが柳田国男だ」（243 頁）という室井流柳田論の輪郭が現われてくるのである。

なお、この柳田国男論では、読者は途中（第 13 章「身捨つるほどの祖国はありや」）から、未曽有の大災害「3.11」の大きな影が差してくることにも気が付くであろう。このあたりから議論もぐっと深化してくるようにも思われる。

これに関連して最後に付記すれば、この 3.11 をはさんで相次いで刊行された柳田国男著『野草雑記・野鳥雑記』、『孤猿随筆』（いずれも岩波文庫）の解説も、室井光広の筆になるものである。あわせてお勧めしたい。